

## 論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名（姓、名）	ナカイ ユウキ 中井 祐希	授与番号 甲 1473 号
学 位 の 種 類	博士( 文学 )	授与年月日 2021 年 3 月 31 日
学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項該当者 [学位規則第 4 条第 1 項]	
博士論文の題名	横光利一の欧州体験と帰国後の日本表象に関する総合的研究	
審 査 委 員	(主査)中川成美 (立命館大学文学部特任教授)	田口律男 (龍谷大学経済学部教授)
	内藤由直 (立命館大学文学部教授)	
論文内容の要旨	<p>【論文の構成】</p> <p>本論文は序章と終章を含む全 6 章で構成される。</p> <p>【論文内容の要旨】</p> <p>本論文は、横光利一の 1936 年の欧州体験と帰国後の作品に描かれた日本表象に注目し、横光がどのようにして日本回帰と呼ばれる思想的境地に辿り着いたのかという問題を、「空間的視座」と「時間的視座」という二つの観点から考察したものである。先ず、「空間的視座」としては、フランスだけに留まらない横光の欧州各国での体験に注目している。横光利一の欧州体験に関する先行研究は膨大であるが、主眼としてもっぱらパリに比重が置かれてきたことを挙げ、「旅愁」が帰国後、約 10 年にわたって書き続けられてきた大作であることを勘案しても、横光の欧州体験がパリのみに集中していることはバランスを欠くことを指摘している。そのうえで、横光が滞在していた 1936 年にヨーロッパを覆った人民戦線運動の隆盛のほか、ドイツのベルリン・オリンピック、ソビエト連邦の覇権主義、スペイン内戦の勃発などに視線を注ぎ、そうした列強国に囲まれたヨーロッパ（周縁）国の動向にも触れていた横光の著作の重要性を指摘した。特に横光は、ブダペスト体験を「罌粟の中」（『改造』1944.2）などのように、後年作品化していることを鑑みても、横光の欧州体験をパリ体験とみなしてしまうことの短慮を批判、横光が 1936 年のヨーロッパの国々で体験した諸相を総合的に考察する必要性を強調している。そしてその分析が、ヨーロッパ認識をどのように変容させ、後年の日本回帰に繋がっていったのかを、考察していくことになる」と筆者は強調している。</p> <p>また「時間的視座」として、戦前・戦中・戦後という各時代の特異性と連続面に着目して「旅愁」の調査・分析する必要があることを指摘している。戦前・戦中・戦後という日本の社会や政治体制、人々の価値観が激動する時代の中で書き継がれた「旅愁」本文もその時代毎で揺れ動いているのであり、戦後は GHQ/SCAP の検閲によって本文の書き換えを余儀なくされたことへの注目を促している。このように「揺れ動くテキスト」としての「旅愁」をイマ・ココの地点から分析し、断罪していくことには注意すべきだろうと主張する。そこで戦前なら戦前、戦中なら戦中といった同時代状況を重ね合わせ</p>	

ていく作業である。本論文では、その意思のもとに異同箇所を検討など、テキスト・クリティークに十分な注意を払っている。従来一括りにされがちだった欧州や、固定された地点から固定化された作品として読まれ評価されてきた「旅愁」といった視点ではなく、本論文は横光の欧州体験と帰国後の作品をⅠ空間的視座・Ⅱ時間的視座という二つの観点から細かく割って吟味・検討を加え、なお、各章で出来した結論を総合化する作業を経ることで、欧州体験以後の横光文学の可能性と問題性を剥出することに主眼が置かれている。

次に各章の概要を示す。序章「横光利一は欧州でどのような足跡を残していたのか」で、欧州体験の経緯と経路を確認した後、当時における横光の欧州体験の意義が論述されている。当初、個人的な遊学だと考えていた横光が、徐々にジャーナリズムや日本文学を背負うようになっていった状況を指摘されている。第1章「航路(ルート)を詠む・起源(ルーツ)を詠む——横光利一と洋上句会——」では、パリに着くまでの欧州航路での体験を取り上げている。横光が乗船した日本郵船箱根丸に俳人高浜虚子が同乗したことから、その船内で洋上句会が計五回催されている。横光が句会で詠んだ俳句を分析対象とし、ペナンやアデンなど各寄港地での体験や虚子が提唱した熱帯季題論を参照しながら、徐々に言語とトポスの関係について横光が関心を深めていく経過が、ここで論述されている。航路(ルート)を詠むから言語や季語が有する起源(ルーツ)を詠むという飛躍を経験して、横光の関心の所在は変化・深化していったことが指摘された。

第2章「隆起する『欧州紀行』——横光利一のパリ体験——」では、滞在中に書かれた海外紀行文「欧州紀行」を取り上げ、横光のパリ体験についての考察が行なわれている。帰国後の地点から遡及的に物語化された「旅愁」とは異なり、人民戦線運動がピークを迎えつつあったパリ滞在中にその大部分が執筆された「欧州紀行」は、まさにわからないものをわからないなりに書き記そうとした作品だと位置づけている。そして、「欧州紀行」におけるパリの都市空間や人民戦線運動下で生活を営む住民を横光がどのように見て、描いていったのかに注目することで、「旅愁」とは異なるパリが表出していることが指摘されている。

第3章「書き変わる日本と東欧——横光利一のブダペスト体験——」では、フランスやドイツといった列強国とは異なり、ヨーロッパ史において当時〈周縁〉国として見なされてきたハンガリーでの体験と、そこを舞台とした小説「罌粟の中」を取り上げ、当時ハンガリーで喧伝されたツラニズムの思潮を踏まえることで、「罌粟の中」に登場するヨハンがツラニズム関係者であることを確認している。その後、「罌粟の中」で音や言葉がキーワードとなっている点に注目し、「旅愁」との類縁性を指摘されている。特に執筆時期が近かった「旅愁」第5篇での東洋と西洋の二項対立という問題から距離を置こうとする矢代の思想の背景に、日本とハンガリーの紐帯が「罌粟の中」に影響を及ぼしていることが、ここで指摘された。

第4章「横光利一とベルリン・オリンピック——身体感覚・認識・トポス——」では、「欧州紀行」でのベルリン滞在時の記述とオリンピックの観戦記を分析することで、横光がどのように選手達を評価し、思惟を巡らせていったのかについてが考察されている。特に、オリンピックでの日本選手達の不振の理由を天気のせいだと横光が解釈している点に注目し、日本人の身体が環境やトポスによって影響を受ける、いわば植物的な

存在であるとみなしていたことを指摘している。そして、このような植物的な身体観が、帰国後書かれた「旅愁」にも受け継がれて、東西の抜きがたい対立構造を厳しく峻別していると言及している。

第5章「〈異言語〉への旅と愁い——横光利一『旅愁』論——」では、「旅愁」の登場人物である矢代の〈異言語〉体験に注目し、「旅愁」前半部と第3篇以降の連続性について考察が行われている。「旅愁」には、日本対西洋といった抽象的・思想的な問題が提出されているだけでなく、登場人物達を取り巻く多種多様な〈異言語〉が全篇を通して散りばめられている。パリ生活での〈異言語〉体験や、帰国後の標準語と異なる言語（古神道の「イウエ」や、郷里で出会う浄瑠璃口調の老婆等）との出会いがどのように矢代の思想に影響を与えていったのかについて分析された。加えて、矢代の世代での国語化政策の動向を踏まえることで、自分たちの世代はすでに西洋化されているといった意識を読み取り、帰国後古神道へ関心を向けていく矢代の理路が明らかになっている。

第6章「それでも最期は微笑を浮かべて——横光利一『微笑』論——」では、横光が戦後、厳しく戦争責任を問われる中で発表した小説「微笑」を取り上げ、登場人物の栖方を通して、横光がどのように戦中戦後という時代を捉え直し、作品化していったかについてが論述されている。微笑を浮かべていた栖方が敗戦によって発狂死してしまったという脚色のされ方や、「一方を真理とすれば他の方が怪しく崩れ、二つを同時に真理とすれば、同時に二つが嘘となる」という〈排中律〉の提示、戦後に生きる人々が戦中という時代やそこでの人々を嘲笑していこうとする要素に注目することで、横光が冷笑的な戦後空間に異議を唱えようとしていたことに注目した。

終章「横光利一の足跡を辿り終えて」では、全6章で抽出した論点から、一貫したテーマや発展性を考察して、土（トポス）への関心が、徐々に空へと向かっていく経緯を確認している。「欧州紀行」や「旅愁」では、当初から土に対するこだわりが垣間見え、それが土（トポス）と言語や身体との関係へ繋がっていると解釈している。そのため、土に対するこだわりがある以上、その土地（トポス）が異なっている人や文化などは相容れないというアポリアを克服して、その「断層」を越えるモチーフとして空が見出され、それが「旅愁」での中心的なテーマである矢代と千鶴子の結婚や、家（歴史）の問題、東洋と西洋の対決と調和といった要素へ結実していくことを論述している。全6章の分析を通して申請者は、横光があくまでも具体的な素材（例えば俳句や言語や身体）から日本回帰の問題に迫ろうとしていた点、そして二項対立を意識しつつも、そこから零れ落ち、また対立を無化させていくような要素（例えば、パリの外国人やハンガリーというトポス、「微笑」で登場する栖方）に注目した横光に着目して、自身の培ってきた言語や身体観が結局のところ西洋由来のものに過ぎないのではないかという気づきを与え、そうした西洋意識の脱色化を図った作品として「旅愁」を位置付けている。

**【論文の特徴】**

本論文は、横光利一のヨーロッパ体験とそれを元に執筆された作品群を研究対象として、作品内で描き出された「日本表象」に着目しながら、横光がどのような過程を経て「日本回帰」と呼ばれる思想的境地に辿り着いたのかを明らかにしたものである。戦間期における横光利一の欧州旅行の足跡を丹念に辿りつつ、その時々々の身体感覚や言語感覚の変容を丁寧に吟味したうえで、『旅愁』その他の文学テキストにおける日本表象の特質を、通時的・共時的に再検証したものである。従来、この時期の横光文学の評価は、戦争協力との関係から評価されてきたが、申請者は、そうした評価を斥け、横光利一の日本回帰と呼ばれる現象の内的な連続性を明らかにすることに成功している。これまでの定説を覆していこうとする気概に満ちた論文として高く評価できる。

**【論文の評価】**

横光利一の戦間期における欧州体験を枢軸に据え、その体験を「空間的視座」と「時間的視座」の両極から分析しようとする構想は、横光研究に新たな観点を加えるものとして評価できる。そのために申請者は同時代資料の扱いとテキスト分析の関係に着目して、優れた資質をもって、これまで埋没していた同時代資料を発掘し、横光テキストと関連付けを行ったことは非常に有効であったと考える。本論文は全体がきれいにまとまっており、たいへん読みやすく、また、説得力にも富み、横光の問題を今ここで引き受けようとする申請者の姿勢も高く評価できる。

各章ごとに施された解釈や知見は、今後の横光研究にも影響を与えていくことになろうかと考える。その上で、敢えて言うと、きれいにまとまっているそのこと自体が本論文の弱点にもなっているのではないかという意見も逆説的にはあるが浮上した。具体的に示すと、日本の戦間期の複雑な国際的位置についてであるが、議論の中心が横光の欧州体験であるため、日本の文脈を整理して、それを後景へ押し込めて、ヨーロッパの同時代空間に共鳴させようとした試みは、本論文では成功しているという意見で一致した。申請者は、個人の物語と大きな物語（歴史）との関係について、あくまでも作家の足跡に寄り添い、横光の日本表象の内的な必然性を明らかにすることにあり、それは貫徹されていると考える。日本とヨーロッパの差異を横光利一という作家の欧州体験から考察しようとするダイナミズムをぜひとも今後の研究で発展させてほしい。したがって、これらの疑義は瑕疵とはなっておらず、今後への期待を包摂するものである。今後、横光利一研究のみならず、他領域と接合しながら文学研究に寄与する秀逸な論文と認め、博士号取得に値すると、審査員一同が認めた。

以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。

試験または学力確認の結果の要旨

本論文の公開審査は二〇二一年一月一四日（木）午後六時から八時まで、オンライン（ZOOM）にて行われた。審査委員は主査・中川成美、副査・田口律男、内藤由直の三名であった。公開審査の質疑応答において、論文に関する申請者の応答は的確であり、充分の知見が示された。また本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程（日本文学専修）の在学期間中における主要学会誌への論文発表、海外を含む学会発表などの様々な研究活動、また高い外国語運用能力を用いて、調査活動や学会活動を活発に行った。博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

よって、審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づいて、博士（文学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。